

# 末黒野

すぐろの

10月号（通巻818号）



# 朝涼し

小川玉泉

忍び鳴く森の鳥や明易し  
朝涼し妻の手をとる夢に覚め  
みんみんの声の移りぬ朝餉前  
眼を病むやトマトの皿の縁二重  
結葉を洩れて閃めく真昼の日

夕蟬の絞り鳴く声カレー煮る  
夕月や網戸をくぐる海の風  
耳覆ふ雷鳴に箸置きにけり  
みんなんの狂詩曲めき夕まぐれ  
金亀子襖へ三度体当たり  
足元の電気蚊取りや灯のみどり  
簾越し隣家ははやも真の闇  
妻恋悼熊切修氏ひの径の寧かれ青胡桃

# 梅雨の月

松本三千夫

父の忌や小暑の雲の力満ち  
五十枚に満たぬ棚田や青田風  
玄関のこんなところに蜘蛛の糸  
梅雨晴の妻の健啖まぶしめり  
青梅雨や髭題目の碑のしとど  
梅雨の月選旬疲れの眼の痒し  
暑中見舞万年筆はモンブラン  
花火果つ立ちて払へる尻の砂  
波音の引くとき涼し星の綺羅  
百歩にて池一巡り風涼し  
籐椅子悼熊切修詩兄に坐すや忽ち寝入る妻  
偕老の光子修の星涼し

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## かたつむり

安斎久英

回し切る傘の雫や七変化  
目交に潜水艦や薔薇の苑  
かたつむり殻は枷とも保身とも  
口中に弾け朝採りミニトマト  
空蟬のまなこ此の世の艶失せず  
太宰忌と気付く夕べやほととぎす  
笹子トンネルつくづく長し麦の秋  
標高の千余の峠露涼し  
音もなく影重ねをり竹落葉  
岩肌に入日とどめて滴れり

## 濃紫陽花

大橋伊佐子

若竹や真つ直ぐと言ふ潔ぎよさ  
峽包む闇の匂ひや栗の花  
夕靄へ大きく沈む濃紫陽花  
沙羅咲くや独りに馴れて十五年  
まくなぎを乱して夫の墓拜む  
白昼の鳩に噴水上りけり  
岩清水啜り火照りを鎮めけり  
滴りの一滴光る瞬時かな  
墓山へ道の刈らるる土用かな  
サンガラス心の翳り見せまじく



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 苔の花

西川みほ

荒梅雨や一句とどむる薯袋  
極暑予報赴任せし子の地や如何に  
夏帽子買うて膨らむ旅心  
川音の途絶え広がる夏野かな  
川隔て日傘振り合ふ会釈かな  
すずらんに風鳴る湖畔野草園  
湯の神を祀る岩間や苔の花

## 筒鳥

森清堯

山峽に雨意のこもりぬ栗の花  
花南天苑の茶室の軒霏  
黒南風や楯の洞より鳥の声  
山里の空の高さや合歓の花  
筒鳥の声渡りくる山湖かな  
軍港や薔薇のアーチに艦収め  
窓越しに受くる一礼朝涼し



薄　　暑　　吉田きみえ

捨てかぬる名刺あまたや夜の薄暑  
嫁ぎ行く孫のやさしさ濃紫陽花  
母の忌や供華の牡丹の花明かり  
水奔る溪やうぐひす鳴き止まず  
病名に触れずに別れ濃凌霄花  
炎天や我が影踏みて坂下る  
池の鯉はねてそれきり青葉風

半夏生草　　石黒興平

麦秋や幼なじみの農具鍛冶  
回廊の手擦れの擬宝珠沙羅の花  
子の髪を撫でゆく茅花流しかな  
木道の補修の音や半夏生草  
梅雨晴や近く見えたる逗子葉山  
楸の蔭広びろと梅雨晴間  
白鷺の魚梯を去らぬ番かな

合歡の花　　岡田史女

晴れ渡る楷樹の空や時鳥  
十葉や北条廟のをぐらきに  
老鶯のしきりと兼好法師展  
読みがたき徒然草や半夏生  
みんなみに雲の片よる合歡の花  
豆飯を炊くや新聞休刊日  
白南風や発条強き傘持ち歩く

結　　葉　　岡野里子

鳥声のさはなる空や梅雨晴間  
緒の色と合はす爪革迎へ梅雨  
水門へ日差傾ぐや行々子  
紫より暮るる山田の花菖蒲  
結葉や水の暗きに鯉の群  
弓形の浜へ白波雲の峰  
土間に影江戸風鈴の静まらず

## 選後に

### 小川 玉 泉

徹しい暑さがやつと峠を越えようとしている。九月号の

本欄を体調不良で休ませて頂いた。その時、年齢には勝てないと、つくづく感じた。しかし、会員の皆さんと、俳句を作る本来の目的は自己実現である。他人のために、会のために俳句を作るのではなく、自分のためである。何かの縁で末黒野俳句会に入つたからには、一会の方針「伝統俳句を守り、今を詠み、平明な表現と深い句意」に沿つた俳句づくりを努めなければならない。「藍生」主宰の黒田杏子さんが師・山口青邨からの言葉として語っておられる。

「あなた方は詩人なのです。詩人はよく見て、たつぷり感じて、ほんとうの日本語で自分のところを表現する人です。大切なのは詩人のたましい。表現者の人間性です」

この言葉を、じっくり味わつて自分の俳句の上に表現してほしい。中でも注意を払いたいのは、ほんとうの日本語

である。よく言われる、「一字違いは大違い」である。仲間同志の句会であれば、「間違つて御免」ですむが、大会句や風雪賞への作品となると、減点対象になってしまう。

今月の出句の中で気になつたものに次の句がある。

① 「初蟬のクレッシェンドに木の間縫ひ」の力タカナ。  
② 「送り火や夫の杖添へ木下闇」③ 「畔川に板一枚の散歩道」の三句。①の「初蟬のクレッシェンドに」のイタリア語。音符に親しんだ人にとっては、普通の言葉。しかし年配者には理解されにくいのでは？そこで、誰もが理解出来る日本語に直せないかと考えてみることも大事である。「木の間縫ふ初蟬声の高まりぬ」とすることも一案。②はお盆の最終日。ご主人を西方浄土へ送る別れの時。一般には送り火は夕暮れどきから夜に掛けて行う。一方の木下闇は日盛りに茂つた木陰に入つて、急に暗さを感じる時のこと。季重なりと共に時間的な矛盾が見られる。そこで木下闇を削り、「送り火や松に預くる夫の杖」としたい。③の「畔川に板一枚の散歩道」は季語がない。畔川は田と田の間の小流れであるから、田の様子を添えればよい。作者は板一枚に気を取られて季語を失念したと思われる。例えば「畔

川に板一枚や稲の花」と詠めばよい。投稿の前にもう一度確認することが大事である。選評に移る。

暮れ方の茅花流しの川原かな

辻井ミナミ

茅花は稲科の多年草の茅萱の花穂で春の季語であるが、茅花流しは茅花の穂綿がほころびる頃に吹く雨を含んだ南風・ながしのことで夏の季語である。夕暮れの河原を埋めて靡く銀色の穂波は見事である。若い花穂は甘い。

サンドイッチにはさみトマトの桃太郎

河合 とき

トマトの桃太郎はタキイ種苗の商品名であるが、大玉の樹上で完熟した甘いトマトの代名詞になっている。作者はそれを承知で求め、輪切りにしてサンドイッチに使ったのである。さぞ甘くて美味しかったことであろう。

降りながら明るき空や走り梅雨

小山 直子

いよいよ梅雨の季節に入った。気象条件の激変する昨今であるが、今のところ、穏やかな梅雨の入りの様に見える。作者は心中の平穏な梅雨であつて欲しいとの祈りを、走り梅雨の空の明るさに託したのである。写生の確かな句。

先師の句葛布にかけて夏座敷

伊藤 由良

葛布は横糸に葛の蔓の繊維を用いた布で、水に強く雨具や袴に使われる。暖簾の代わりにして、それに、先師から頂いた遺墨の色紙を掲げたのである。時折通う風に揺れる

作品を見ながら、過ぎた日を思い出しているのである。

醜草の根性欲しや梅雨に臥し

戸田 澄子

醜草は雑草のこと。庭の草取りをしても、七日と経たぬうちに、またのびて来る雑草。作者は幾つもの病を抱えながら、句作りに懸命である。闘病の言葉そのままの状態であるが、負けまいと頑張っている。勝ち抜いてほしい。

バスを待ち蚊帳吊草を裂いてをり

波多野孝枝

都会の道端に普通に見られる雑草の一つ。子供の頃に、よく茎を割いて、上手に広げると、蚊帳を吊つた形の四角形になるところから、蚊帳吊草と呼んで、遊んだもの。バス停の近くに見つけて、すぐ童心に返る作者は明るい。

取り替へて香の新しき扇子かな

加藤八重子

厚い盛りの外出には欠かせない扇子。鞆の扇子を確かめたところ、可なり痛んでいた。早速新しいものに取り換えて、使ってみると、骨の木の香が漂う。中国土産の様だが何時、誰から頂いたものか、香りと風を楽しむ作者。

草を刈る山百合二本のみ残し

千葉恵美子

栗駒山麓に住まわれる作者。稲作にも精を出しておられる。穂孕みの稲のみどりに、無事を祈りながら畔の草刈りをされた。畔草の中に自然に育つた山百合の白さに、刈る手を止めて残されたのである。清々しい風景が見える。

# 青炎集

## 小川玉泉選



横浜 辻井ミナミ

横浜 小山直子

雨滂沱泰山木の咲く上枝  
未草鯉のあぎとふ寺の池  
麦秋や川の落合ふ堰の音  
**暮れ方の茅花流しの川原かな**  
蹲踞をあふるる雨水額の花  
大夕立天井高き駅舎かな

横浜 河合とき

横浜 伊藤由良

木洩れ日の幾筋注ぎ竹の秋  
**サンドイッチにはさみトマトの桃太郎**  
街なかのピアノ教室てまり花  
鎧戸の夕日翳りぬ額の花  
縁側の猫の熟寝や青時雨  
夕烏に森のふくらむ梅雨の底

子の願ひ七夕竹の撓ふほど  
**降りながら明るき空や走り梅雨**  
亡き夫のカメラ一式風入れす  
栗鼠の尾のしなやかに跳ぶ夏木立  
虫干や嫁しても同じ紋所  
木々の葉をたたく夕立や小半時

藍皿の鱧の湯引きの白さかな  
病む友にまづは裾分けさくらんぼ  
嵐去り薄暑列島覆ひけり  
朝日受け隣の庭の胡瓜かな  
**先師の句葛布にかけて夏座敷**  
つい数を追ひぬ隣家の胡瓜棚

横浜 戸田澄子

裏庭に明るさくれて半夏生

**醜草の根性欲しや梅雨に臥し**

父母のなき里との絆益近し

裏山のだんだん低く雲の峰

二十年の嵩の俳誌の曝書かな

梅雨長しサプリメントを食卓に

横浜 波多野孝枝

梅雨暗間禰宜の竹刀の音激し

**バスを待ち蚊帳吊草を裂いてをり**

路地裏に赤子泣く声額の花

山門を入り下闇の別世界

グラジオラス紅し豪雨に耐えてをり

園児等の指啣へをり枇杷熟るる

横浜 加藤八重子

手擦れたる歳時記開く梅雨の入り

呼吸器科の半期検診梅雨の明け

振り向かず焦らぬ齡花柘榴

星涼し足に馴染める宿の下駄

送別の孫の転勤風薫る

**取り替へて香の新しき扇子かな**

栗原 千葉恵美子

震災の爪痕きびし行者瀧

開拓の径幾曲り岩魚宿

紫陽花の濃き紫は妣の色

**草を刈る山百合二本のみ残し**

孫つくりし貝風鈴をみやげにと

この家の独り暮しや釣しのぶ

横浜 荒井吉一

序破急の急の齡よ夏帽子

梅雨明けや待合室に腰おろし

次の音待つて箸措く遠花火

**酔ひ醒めや反りのよろしき胡瓜噛む**

紫陽花を揺らし下校児別れゆく

坂登り切り老い受くる氷菓かな

横浜 杉山弥生

**早乙女の緋のもんべん千枚田**

荒梅雨や土留の杓の朽ちてをり

親の来て声のひとつは燕の子

葭切の高音途切れず遊水池

高台のひとつ家隠し夏木立

和紙のうへ滑る筆音吊忍

# 巨林抄

若竹の真一文字の意気地かな  
梅雨晴間信号待ちの傘の杖  
緑蔭の風の匂ひや石に座し  
孫迎へ阿修羅の風や夏休  
清流を草書の如く蛇渡る  
幼子の双手さしのべ夕蛩  
あと五年生きて百歳梅雨明くる  
梅雨の朝葉書に二円切手貼る  
老鶯の箴碁弥次るや窓近く  
山裾や植田明かりの広ごりぬ  
梅雨寒の靴の重さや一万歩  
栗の花ほかの匂ひを寄せつけず

鱒崎洋一  
中里昌江  
山崎幸夫  
今野明子  
品川古市  
齋藤眉山  
宮地静雄  
伴秋草  
中村弘  
荒井貞子  
小野弘正  
太田チエ子

# 耕 土 集

## 松本三千夫選



甚平の紐ゆるゆると風さそふ

浜降りの神輿踊りて波の立つ

若竹の真一文字の意気地かな

一里塚榎の幹の青大将

礼服に着替える前のアロハかな

横 浜 鱒崎 洋一

横 浜 今野 明子

万緑の静寂や雨の武家屋敷

したたかなる噴煙叩く梅雨の雨

梅雨晴間神経痛の和らげり

向日葵や恩師囲みて留処なく

孫迎へ阿修羅の風や夏休

中 里 昌江

川 崎 品川 古市

川岸やのの字のの字の青大将

清流を草書の如く蛇渡る

大放水黒四ダムの夏の景

アルプスを映して静か夏の湖

夾竹桃中斐路を赤く白く染め

老犬の病の長しダリア切る

雷雨去りちらすバイクの排気ガス

紫陽花や瓶いつぱいの梅醬

梅雨晴間信号待ちの傘の杖

木の葉揺れ涼気を運ぶ驟雨かな

吉 川 山崎 幸夫

横 須 賀 齋藤 眉山

夕潮にかかれる虹の淡々し

幼子の双手さしのベタ蛭

肩書の無きが身に添ひ缶ビール

人群るる路上ライブや片かげり

神体の石のゆかしき青葉蘭

溝川や儂は主ぞと牛蛙

緑陰の風や睡魔に襲はるる

緑陰の風の匂ひや石に座し

風鈴に妻偲ぶ匂や風清し